

# これからの音楽科教育に関する一考察 II

## 一評価規準を取り入れた音楽科カリキュラム一

音楽科 新 福 一 孝

昨年度は、新学習指導要領の内容をとらえ、音楽科の教育内容を見つめ直し、生徒の実態に合ったバランスのよいカリキュラムを開発するための一考察を行い、「日本や世界の民族音楽に視点をおいた内容」と「一人ひとりの興味・関心、個性を一層生かすことに視点をおいた内容」を取り上げ、具体的な学習内容例をあげた。

今年度は、さらに「なぜ、音楽科教育は必要か」という根源的な視点から学習内容を見つめ、中・高を通したカリキュラムづくりを進めていくことにする。同時に、来年度から高等学校でも取り入れられる評価規準について、その考え方を明確にし、評価規準を取り入れた音楽科カリキュラムについて探っていくことにする。

### I 音楽科教育はなぜ必要？

音楽科教育の必要性としては、次のようなことが言われることが多い。

- 知的教育に関わる教科が多くを占める学校教育において、生徒の情意面に直接関わる音楽科は、生徒の情緒・情操の陶冶を目指すという点において重要な役割を果たすということ。
- 知的領域だけでなく、音楽や造形芸術、人間関係自己の精神安定度などが、生徒の健全な発達の上で重要な役割を果たし、固有の教育的役割を持っているということ。

これらのことを踏まえ、生徒を取り巻く社会や音楽の状況やこれまでの授業を通した生徒の様子や声、さらには生涯教育としての音楽教育などの視点から、学校教育における音楽科の意義を考えると次のようなことが考えられる。

#### ①音楽は心を癒す

知識獲得や考える活動が多い学校教育において、豊かな音楽表現に触れ、感性を豊かに働かせることは心を開放し癒すことができる。

#### ②音楽を通した自己表現

音楽は人の心に訴えるものである。自分の心を開いて表現すること、自分のおもいを音楽を通して他人に伝えることは、豊かな心の育成には大切なことである。

#### ③いろいろな音楽との出会いは自己発見の場

国際化、情報化の進む現代社会において、子供の身の回りはいろいろな音楽が氾濫している。世界中の音楽が手軽に手に入る反面、自分の好きな音楽しか聴かない生徒や一面的な理解でその音楽を聴いてしまう生徒も多い。

世界には、様々な音楽が存在し、それぞれが人々の営みの中で生まれ、大切にされてきたのである。世界の民族音楽、日本の伝統音楽・民謡、クラシック音楽など幅広い分野の音楽に触れることで、自分の音楽観が拡大され、自分にとっての音楽の再発見が行われるであろう。

#### ④人と人との関わりにおいて作り上げる音楽

現在、ハモネプ（テレビ番組の中のコーナー）の影響もあり、ア・カペラブームである。一人が一役を受け持ち、それぞれの個性を発揮しつつも音楽的にまとまり、美しい響きをつくることへの憧れが高いということであろう。このようなアンサンブル活動においては、話し合いぶつかり合いながらも自分たちの音楽をよりよいものにしようとする気持ちが働く。そのため、美しい響きをつくるために相手の音（声）を聴こうと心を寄せ合い、納得のいく音楽表現ができることで、仲間と共に感動を共有する喜びを味わうことができる。これらは、よりよい人間づくりの基礎ともいえるであろう。

#### ⑤生涯を通しての音楽の楽しみ方を学ぶ

人間は何らかの形で一生音楽と付き合い合っていくことになるだろう。自分なりの方法で楽しむこともできるであろうが、いろいろな音楽のいろいろな楽しみ方を子供の頃に身につけることは、生涯教育という視点からとても重要なことであろう。このことが明るく豊かな人生を送ることに役立つことは間違いないであろう。

#### ⑥感性を育てる

大音量の音楽が街中に流れている。身の回りにはいつも何かの音楽が流れている。そんな中で、静寂の中

の美しさに感動する。リズムや旋律のおもしろさ、ハーモニーの美しさに気づき、心地よくなる。など音楽の要素や曲想の美しさを感じ取ることができるということは、感性豊かな人間の形成に大きく役立つであろう。

### ⑦心の財産

多様な音楽に触れ、幅広い音楽の楽しみをもち、人との心のつながりの中で音楽をつくり上げていくこと、また、よい音楽に触れて感動することは、その人の大きな喜びとなり、生涯貴重な心の財産となるのである。

以上のような音楽科教育の意義を考えた上で、学習内容や学習活動を吟味し、中・高6ヵ年における音楽科カリキュラムを作っていくことにする。

## Ⅱ 評価規準と評価の方法

### (1) 評価規準とは

平成3年度指導要録の改定通知の中にその言葉が見られる。これは、観点別学習状況の評価が効果的に行われるようにするために、学習指導要領に示す目標の実現状況を判断するためのよりどころを意味するものとして導入された。つまり、児童生徒が自ら獲得し身につけた資質や能力の質的な面の評価を目指したものである。

### (2) 評価規準の開発

平成10年の新学習指導要領においては、

- ・完全週5日制の下、基礎的・基本的な内容の確実な習得を図る
- ・自ら学び自ら考える力などの「生きる力」を育成する

というねらいが打ち出された。そのねらいの達成のために、平成12年、教育課程審議会答申の中で次のようなことが提言された。

学習指導要領に示す目標に照らし合わせてその実現状況を見る評価（いわゆる絶対評価）を一層重視し、観点別学習状況の評価を基本として、児童生徒の学習の到達度を適切に評価していくことが重要である。

その提言を受けて、国立教育政策研究所の教育課程開発センターで評価規準の開発が行われることになった。

・児童生徒に学習指導要領に示す基礎的・基本的な内容が確実に身に付いているかどうかを適切に評価し、指導や学習の改善に生かすために



・児童生徒の学習の状況をどのような規準や方法などで明らかにしていくかが重要



・学習指導要領の目標に照らして、児童生徒の学習の到達度を客観的に評価するための評価規準や方法の設定の必要性

### (3) 評価規準の設定

教育課程研究センターの報告においては、評価規準の設定の仕方について、次のように述べている。

学習指導要領における内容の  
まとめりごとの評価規準  
↓  
題材における評価規準  
↓  
活動における具体の評価規準

また、内容については

- ・観点別学習状況の四つの観点が基本である。
- ・指導に生かす評価を充実させること。（指導と評価の一体化）

と述べている。つまり、一番大きなまとめりである学習指導要領の内容から各題材へと具体化し、さらに題材における諸活動レベルにまで具体化していくことであり、具体化された評価規準をもとに児童生徒の学習状況の到達度を客観的に評価し、後の学習指導に生かしていけるものでなくてはならないのである。

### (4) 評価の方法

評価の方法は様々であるが、ここでは、音楽科の学習で考えられる評価の方法をあげることにする。

#### ①表現・鑑賞活動の様子を観察

- ・学習への興味・関心・意欲はどうであるか
- ・どのような表現の工夫をしようとしているか
- ・しっかりと表現できているか

#### ②話し合い活動の様子を観察

- ・学習への興味・関心・意欲はどうであるか
- ・どのような感じ方をしているか
- ・どのような表現の工夫をしようとしているか

- ③ノートやレポートの内容を分析
- ・学習への興味・関心・意欲はどうであるか
  - ・どのような感じ方をしているか
  - ・どのような表現の工夫をしようとしているか
  - ・どのような鑑賞の能力が身に付いているか
- ④学習カードやプリントへの書込み
- ・学習への興味・関心・意欲はどうであるか
  - ・どのような感じ方をし、どう変わったか
  - ・どのような表現の工夫をしようとしているか
- ⑤自己評価・相互評価
- ・どのような感じ方をし、どう変わったか
  - ・どのような表現の工夫をしようとしているか

- ⑥発表（実技テストなども含む）
- ・しっかりと表現できているか
  - ・どのような表現の工夫をしているか
  - ・他者の発表をよく聴いているか
- ⑦作品（ペーパーテストなどの含む）
- ・どのような表現の工夫をしているか
  - ・どのような感じ方をしているか

### Ⅲ 中・高6ヵ年の題材計画

昨年度及び今年度のこれまでの考え方、新学習指導要領の内容、さらには、本校の生徒の実態を考えながら、中・高6ヵ年の題材を次のように計画した。

	題 材		題 材
中 学 1 年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オリエンテーション（校歌斉唱、学友会歌）</li> <li>○リズムとハーモニー</li> <li>○旋律の重なり</li> <li>□混声合唱の響き1</li> <li>○◇日本の歌（詩と旋律に注目して）</li> <li>○イメージと音楽</li> <li>☆日本の伝統音楽（雅楽）</li> <li>☆アジアの音楽に親しもう</li> <li>☆郷土の音楽に親しもう（楽器が中心）</li> </ul>	高 校 1 年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オリエンテーション（校歌合唱、学友会歌）</li> <li>◇音楽でめぐる世界の旅（世界の歌）</li> <li>□ア・カペラの響き2</li> <li>□混声合唱の響き4</li> <li>◇映画とミュージカルの歌1</li> <li>☆○箏のための変奏曲をつくって演奏しよう</li> <li>□リコーダーアンサンブルの響き</li> <li>□ギターアンサンブルと弾き語り挑戦</li> <li>☆○中世・ルネサンスの音楽</li> <li>☆○バロック音楽、古典派の音楽</li> </ul>
中 学 2 年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オリエンテーション</li> <li>○速度と強弱</li> <li>□混声合唱の響き2</li> <li>□いろいろなアンサンブル（ア・カペラ、ギター、リコーダー など）</li> <li>○◇日本の歌（旋律と伴奏の関わりに注目して）</li> <li>○オーケストラの響き</li> <li>☆日本の伝統音楽に親しもう（尺八、箏曲）</li> <li>☆世界の民族音楽に親しもう1（歌中心）</li> <li>☆郷土の音楽に親しもう（民謡）</li> </ul>	高 校 2 年	<ul style="list-style-type: none"> <li>◇○芸術歌曲</li> <li>□ア・カペラの響き3</li> <li>□混声合唱の響き5</li> <li>◇映画とミュージカルの歌2</li> <li>☆和楽器に挑戦（三味線、三線、尺八・・・）</li> <li>□ギター弾き語り</li> <li>☆ロマン派の音楽1</li> <li>☆三味線音楽に親しもう（語りもの）</li> </ul>
中 学 3 年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オリエンテーション</li> <li>◇日本の歌（日本の情景、日本の心、ポピュラーソング）</li> <li>○旋律の表情</li> <li>□ア・カペラの響き1</li> <li>□混声合唱の響き3</li> <li>□ギターに親しもう</li> <li>◇世界の愛唱歌</li> <li>○オペラとバレエ</li> <li>☆日本の伝統芸能（能・狂言、文楽、歌舞伎）</li> <li>☆世界の民族音楽に親しもう2（楽器中心）</li> </ul>	高 校 3 年	<ul style="list-style-type: none"> <li>◇○芸術歌曲</li> <li>◇ポピュラー音楽</li> <li>□ア・カペラの響き4</li> <li>□混声合唱の響き6</li> <li>☆ロマン派の音楽2</li> <li>☆近代・現代の音楽</li> </ul>

○は音楽的な要素が中心、□は活動が中心、◇は愛唱歌にしたいもの、☆は世界の民族音楽・音楽史

Ⅳ 評価規準の具体化

(1) 評価の計画

ここでは、高校1年生の年間計画を取り上げ、評価の計画を立てることにする。(※7～Eは学習指導要領の指導事項)

観点	音楽への関心・意欲・態度	音楽的な感受や表現の工夫	表現の技能	鑑賞の能力
A 表現・歌唱	・歌詞の内容や曲想、曲想に応じた発声や言葉の表現、声部の役割と全体の響きに気をつけて発声や言葉の表現を身に付けている。	・音楽の構成要素・表現要素を知覚し、それらが生み出す曲想や美しさを感じ取っている。	・歌詞の内容や曲想、曲想に応じた発声や言葉の表現を身に付けている。	・歌詞の内容や曲想、曲想に応じた発声や言葉の表現を身に付けている。
	・いろいろな楽器の音色や奏法、その美しい音色や奏法、楽器の構成や曲想、楽器の役割と全体の響きに気をつけて発声や言葉の表現を身に付けている。	・音楽の構成要素・表現要素を知覚し、それらが生み出す曲想や美しさを感じ取っている。	・楽器の構成要素・表現要素を知覚し、それらが生み出す曲想や美しさを感じ取っている。	・楽器の構成要素・表現要素を知覚し、それらが生み出す曲想や美しさを感じ取っている。
A 表現・器楽	・いろいろな楽器の音色や奏法、その美しい音色や奏法、楽器の構成や曲想、楽器の役割と全体の響きに気をつけて発声や言葉の表現を身に付けている。	・音楽の構成要素・表現要素を知覚し、それらが生み出す曲想や美しさを感じ取っている。	・楽器の構成要素・表現要素を知覚し、それらが生み出す曲想や美しさを感じ取っている。	・楽器の構成要素・表現要素を知覚し、それらが生み出す曲想や美しさを感じ取っている。
A 表現・創作	・いろいろな音階や旋律と和音の関わり、音楽の組み立て方やいろいろな音階に関心をもち、旋律作りや和音づけ、作曲や即興的な表現などの活動に意欲的である。	・音楽を構成する様々な要素や音楽の仕組みを感じ取っている。	・音階の特徴を生かした創作や和音付けの技能、楽曲の構成や形式を生かした創作の技能を身に付けている。	・音階の特徴を生かした創作や和音付けの技能、楽曲の構成や形式を生かした創作の技能を身に付けている。
B 鑑賞	・声や楽器の特性と表現上の効果や楽曲の歴史的背景に関心をもち、意欲的に取り組んでいる。	・声や楽器の種類や特性、楽曲中の表現もたらすそれぞれの効果を感じ取っている。	・声や楽器の特性、アンサンブルの効果を感じ取り、楽曲全体を味わって聴いている。	・声や楽器の特性、アンサンブルの効果を感じ取り、楽曲全体を味わって聴いている。
<p>※題材についての注意事項 我が国の伝統音楽、世界の諸民族の音楽については、総合的な学習の時間において、生徒全員が学習や体験活動ができるようにする。</p>				
時間	題材の名称	教材名	題材の規格	題材の規格
2時間	オリエンテーション	「校歌」 「学友会歌」	約 曲想を感じ表現を工夫している	約 表情豊かに合唱している
10時間	音楽でめぐる世界の旅	「オーソレ ミオ」 「グリーンズリースプス」他	約 曲の表情を感じ取り、発音や語感、リズムや旋律の歌い方を工夫している	約 発音や発声に気を付け、歌詞内容を生かして歌っている
10時間	箏のための変奏曲を作って演奏しよう	箏による創作	約 箏の音色や余韻を感じ、それらを生かした変奏曲を作っている	約 箏の音色や余韻を生かし、箏の音色を生かした変奏曲を作っている
6時間	ア・カペラの響き2	「ふるさと」 「はるかな女へ」	約 各声部の特徴と役割、全体の響きを感じ取り、曲想表現を工夫している	約 四声のバランスのよい美しい響きをつくる技能を身に付けている
5時間	混声合唱の響き4	「歓喜の歌」 時期に合った合唱曲	約 発声や発音、一体感のある音色を感じ取り、曲想表現を工夫している	約 各声部の全体的な調和を図って表現する技能を身に付けている
3時間	映画とミュージカルの歌	「Memor y」 「A whole new world」	約 曲の背景にある心情を感じ、発声や発音、フレーズや強弱を工夫している	約 主人公の心情になって、表情豊かに歌う技能を身に付けている
5時間 5時間	ギターに挑戦	「少年時代」 (7ノボル) 「大きな古時計」 (新編)	約 曲の和声の進行やフレーズを感じながら、ギターの奏法を工夫している	約 ギター・アコースティックの調和を図って表現する技能を身に付けている
3時間	リコーダーアンサンブルに挑戦	「木星」他	約 リコーダーの音色、アンサンブルの響きに気をつけて取り組んでいる	約 リコーダーの音色やアンサンブルの響きを生かして表現する技能を身に付けている
10時間	バロックと古典派の音楽	バッハ、ヘンデル、モーツァルト、ベートーヴェンなど	約 時代背景や曲の背景、表現要素などを感じ取り鑑賞の工夫を工夫している	約 曲に關わる背景や音楽的要素などから総合的に聴いている

(2) 第4学年題材「ア・カペラの響き」への評価規準・評価方法の位置づけ

年間の評価計画（題材レベル）をもとに、学習活動における評価規準を具体化すると次のようになる。

ア 音楽への関心・意欲。態度	イ 音楽的な感受や表現の工夫	ウ 表現の技能
①ア・カペラの響きに関心を持って意欲的に取り組んでいる。 ②各パートの旋律の動きに関心を持ち、意欲的にパート練習に取り組んでいる。 ③全体の中での自分のパートの役割に関心を持ち、意欲的に活動に取り組んでいる。 ④グループでのアンサンブルに関心を持ち、協力しながら意欲的に取り組んでいる。 ⑤ア・カペラの響きや各グループの表現に関心を持ち、意欲的に発表や鑑賞の活動に取り組んでいる。	①各声部の旋律の流れを感じ取り、パートにおける自分の発声や音程の取り方を工夫している。 ②四声の重なった響きを感じ取って曲の流れにのった表現を工夫している。 ③各パートの音の重なりからつくられる和声の響きを感じ取りながら美しい響きをつくりための発声の仕方やフレーズの感じ方、強弱の付け方などを工夫している。 ④小グループにおける全体のバランス、フレーズのまとまり、和声の響き、強弱などを工夫している。	①頭声的な発声の仕方に気を付けて歌っている。 ②自分のパートの音取りを確実にを行い、他のパートの音を聴きながら歌っている。 ③合唱の響きを感じながら、フレーズのまとまりや強弱を生かした表現をしている。 ④グループアンサンブルの響きを感じながら、フレーズのまとまりや強弱を生かした表現をしている。

これらの評価規準を題材の指導計画に位置づけると次のようになる。

時	主な学習活動・学習内容	留意点	評価規準	評価の方法
1	①ア・カペラを鑑賞する。 ②「ふるさと」の範唱を聴く。 ③パート練習をする。 ④全体で合唱する。	○ア・カペラは生徒に身近な、ゴスペラーズの歌などを取り上げて、活動への意欲を高めるようにする。	アの①② イの① ウの①②	・学習カードへの記述 ・活動の観察 ・活動の観察
2	①パート練習をする。 ②録音して評価する。 ③課題をとらえてパート練習する。 ④全体の調和を図りながら合唱練習をし、録音して聴く。	○調和のある合唱にするためのポイントを考えさせる。 ・フレーズの感じ方（音の長さ、ブレスの取り方など） ・強弱の付け方の統一。発音など	アの①③ イの② ウの②③	・活動の観察と学習カードへの記述 ・活動の観察とプリントへの書き込み ・活動の観察
3	①「はるかな友へ」の鑑賞と概要把握 ②パート練習 ③他パートとの合同練習 ④全体での合唱練習（部分練習）	○パート練習においては、教師が他のパートを歌ったり、他パートと合同練習を組ませたりして工夫する。	アの①② イの① ウの①②	・学習カードへの記述 ・活動の観察 ・活動の観察
4	①各パート練習 ②全体での合唱練習 ③録音して聴く。 ④改善点の話合いと全体練習 ⑤全体合唱とまとめ	○パート練習で自信がもてるようになったら、他のパートと組み合わせ、響きを感じながら練習できるようにする。	アの①③ イの③ ウの③	・活動の観察と学習カードへの記述 ・活動の観察とプリントへの書き込み ・活動の観察
5	①グループをつくり、発表曲を決める ②グループごとに分かれ、発表会に向けての練習をする。	○これまでの授業を想起させ、響きを大切にするとともに、曲想表現の仕方を工夫させるように促す。	アの①④ イの④ ウの④	・活動の観察と学習カードへの記述 ・プリントへの書き込みと相互評価 ・活動の観察
6	マルチメディアホールでの発表会	○次のグループは、ホールの外で打ち合わせる。 ○進行は音楽係とする。	アの⑤ イの④ ウの④	・活動の観察 ・歌唱活動の観察 ・歌唱活動の観察

### (3) 題材「ア・カペラの響き」の実践を通して

今回、評価規準を生徒の活動レベルにまで具体化し、実践を行ったが、これまでの授業と比較してみても次のようなことを感じることができた。

○各時間に、評価の観点に基づいた3～4の評価規準を設定し、その具体的な姿に照らし合わせて生徒を評価したことで、その時間で目指す生徒像に至っていない生徒に対して、特に丁寧な指導をすることができたと思う。必要な時は、昼休憩や放課後なども使い、個人指導をすることで、生徒も自信を持つことができたようである。これまでの指導の中でも気を付けようと思って取り組んできたことではあったが、自分の中での規準がハッキリしていたために、「この生徒には必ず関わらなければならない」という指導ができた。

○学習カードやプリントへの書き込みなど、評価の方法を明確にしたため、個々の生徒がどのように考えて音楽づくりに取り組んでいるのかをつかむことができた。ただ、目を通す時間が結構かかったように思う。

●具体的な評価規準は設定したが、さらに具体的な姿を想定する必要もあるように感じた。例えば、「各パートの旋律の動きに関心を持ち、意欲的にパート練習に取り組んでいる。」という評価規準であれば、ほぼ満足している状態とどのような状態であるのか。つまり、「プリントに他のパートを意識した表現がどの程度書いてある」とか「他のパートの人と聴き合いながら練習している」などの姿である。「どんな姿が意欲的なのか？」特に、関心・意欲・態度の面や感受など心情に関する部分は評価するのが難しいように感じた。

○「評価する」ということは、生徒の姿を詳しく見ることであるが、同時に教師の指導の在り方を評価しているという意識をより強く感じることができた。

○評価規準を設定することで、生徒自身、「その時間にどんなことをして、どんな姿になればいいのか」明確にできるため、活動意欲も高まったように思う。

### (2) 課題

○音楽には、いろんな表現があり、特に「これがよい表現である」と断定できるものではない。どのような姿」「どのような音楽づくりが」という設定の仕方について、さらに研究をしていく必要があると感じる。

○今回は高校1年生の評価の年間計画を立てることができたが、中・高6ヵ年の評価の指導計画とともに評価計画を立てることが必要である。そして今後は、実践を通してそれらの妥当性について検証し、改善していくことが大切になると考える。

最後に、音楽の授業でのびのびと自己表現し、他者と音楽をつくりあげる楽しさを共有する喜びを味わう姿。美しい音楽に触れ、感動し、心豊かな生活を送っている姿。中・高校での音楽学習での学び（音楽のつくり方、楽しみ方、演奏技術など）を生かして、人生を楽しんでいる姿。そのような姿を思い描きながら、これからも音楽教育についての研究を進めていきたいと考える。

### 【参考文献】

高等学校学習指導要領解説 芸術編  
教育実習Ⅲの手引き（広島大学教育学部平成14年度）  
広島県教育委員会資料より中学3年生の評価計画  
「評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料」  
（平成14年2月 国立教育政策研究所教育課程研究センター）

## V 研究の成果と課題

本研究を通して、次のような成果と課題をあげることができる。

### (1) 成果

○昨年度の研究と音楽科の存在意義を考え、中・高6ヵ年の流れや発達段階を考えた題材の計画を立てることができた。

○高校1年生の年間の全ての題材について、指導要領や中学校の資料などをもとに、評価計画を立てることができた。